

京都市地域・多文化交流 ネットワークサロン通信

発行日 2015 年 12 月 31 日 編集・発行 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン 第 16 号

東九条の語り部たち



東九条での聞き取り調査の様子から

『東九条の語り部たちⅡ－11 人の聞き取り報告－』の編集が大詰めを迎え、2016 年 1 月中旬に発刊する予定になりました。東九条での聞き取り調査報告書は 2013 年 7 月の発刊に続いて、第 2 期のものとなります。前回の報告書は、13 人の在日コリアン 1 世と 1 人の日本人からの聞き取りをまとめたものでしたが、今回は 4 人の在日コリアン 1 世と 5 人の在日コリアン 2 世、そして 2 人の日本人のものです。

聞き取り調査は、在日コリアン 1 世が高齢化し、貴重な体験を後世に残すことが困難になってきたことから始められました。「今、聞いておかないと」という危機感から、前回の報告書は日本人を除いて在日 1 世に限ったものになりました。在日 1 世の多くは、ある程度の年齢で朝鮮半島から日本に渡航し、京都以外の場所で労働し、後に東九条で生活をされているために、東九条についての語りは比較的少なくなっています。今回の調査では、聞き取り対象を在日 2 世にまで広げたため、東九条生まれの方や幼児期から東九条で生活してこられた方も多く、東九条の戦前から戦中、そして戦後の様子が生き生きと語られています。

廃品回収、土方、闇米、馬車による運搬、失業対策事業等々と家族のためにありとあらゆる仕事をされてきたことが克明に語られています。そして、食事をする暇もないほど無我夢中に働く姿は力強く、迫力を感じるものです。仕事を休めないため、近所の人や子どもたちの世話をし、病院にさえも連れて行ってもらうなど、相互扶助によって生活が成り立っていたこともわかります。助け合うのは同胞同士だけではなく、日本人の姿もそこにはあります。読み応えのある報告書になりました。東九条の先輩たちの語りをとお楽しみ下さい。

(前川 修 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン)

2015 年 10 月 10 日、きむ きがん さんが主催される劇団石(トル)の劇あそび「カンアジトン ～こいぬのうんち～」が開催されました。

今回の企画は、子育て支援ステーション事業として、京都市地域・多文化交流ネットワークサロンと共催で行いました。日頃、児童館では子どもメインの行事が多いのですが、今回はネットワークサロン共催ということで、地域の方や高齢者の方々がたくさん。保育園の乳児さんから高齢者の方までが会場いっぱい集まった中、きがんさんによる劇が始まりました。

開始早々からきがんさんの世界に引き込まれていき、子どもたちの目は終始キラキラ。劇の中で子どもたちをステージに上げていく場面があり、ステージ上で子どもたちがのびのびと、そしていきいきとしている姿に、職員はただただ感激でした。会場は笑いとお熱気であふれ、幅広い年齢のみなさんで同じ時間を過ごして、「楽しい!」「面白い!」を共有できることが、幸せに感じられました。劇団石さんをはじめ、この企画に協力してくださったみなさんに、感謝いたします。ありがとうございました。

(希望の家児童館厚生員 平山恭代)



「まあまあおもしろかった…」とクールな感想のYちゃんもこの表情!!



凌風学区子育て支援ステーション事業

劇団石(トル)の劇あそび

カンアジトン ～こいぬのうんち～



- 友だちがした牛がおもしろかった。
- きがんさんがいろんな人を巻き込んでいたのがおもしろかった。
- ○○くんとはじめてすもうができてうれしかった。
- (きがんさんが) ボクシングみたいにかえしてきたのがおもしろかった。
- また、めっちゃ見たい!!
- うんちがたんぽぽになっておもしろかった。

話はつきず…

(希望の家児童館 子どもたち)

感激した！！ あんなのはじめてや。一人であんなに動くなんでできひん。ほんまよかった！！ 何回もやってほしい。（なべさん 76 歳 男性）

初めての経験に、子どもたちも職員も緊張していましたが、居心地の良い雰囲気に入り込め、自然と受け入れてくれていたように感じます。劇中、相撲対決に、れいんぼうの男の子が呼ばれ、参加する場面もありました。戦うことなく、相手にそっと寄り添う姿を見て、彼の優しい一面を改めて知ることができました。
（障がいのある中高生のタイムケア事業れいんぼう職員 並川明日香）



私自身、演劇を見てこんなに笑ったのは久しぶり？初めてかもしれません。おなかがよじれるくらいケラケラ、ゲラゲラ笑いました。子どもたちと一緒に見に行ったのに、仕事中であることを忘れるくらい…（笑）。子どもたちも笑ったり驚いたり、また笑ったり、子どもたちなりに、何かを感じ理解し、楽しみながら見ていました。きがんさんの小さな体からあふれたすパワー、パワー、パワー！！ 本当にすごかったです。クラスにも「うんこ」というよく似たストーリーの絵本をおきました。みんな大スキな絵本です。
（希望の家カトリック保育園 2 歳児担当 居川千裕）

- ① 一回観るともう一度観たくなる。
- ② くせになるのが、きむ きがん さんのお芝居だ。
- ③ 一瞬にして観客を魅了する。
- ④ 彼女のパワーはどこから来ているのか。
- ⑤ 時折汗をぬぐう姿に心を打たれました。
- ⑥ 力強さとしなやかさ、コミカルながら涙をさそう。
- ⑦ そんな彼女の今回の作品はくカンアジトン>という童話をもとに創作された。
- ⑧ 白い子犬が残っていたうんち、小鳥や牛、土けら、七色の雨を降らせタンポポまで咲かせる。
- ⑨ 会場に集まった子どもたちは見事な早変わりにやや興奮ぎみ、歓声を上げて喜んでいました。
- ⑩ 私の肥やしになってほしい…
- ⑪ タンポポの言葉に自信と生きる意味を見出したカンアジトン。
- ⑫ 誰もが大切な存在であること。
- ⑬ 人は誰かの夢と希望になれる素晴らしい存在であるということ。
- ⑭ 深く感銘を受けました。
- ⑮ 次回作を期待しています！

（コリアみんぞく教室講師 金良江）



2015 年度第 3 回ボランティア講座

アルコール依存症の理解と支援



佐藤晋一さん（右）と杉山昌儀さん

2015年10月31日（土）、京都市地域・多文化交流ネットワークサロンが主催する、2015年度第3回ボランティア講座「アルコール依存症の理解と支援」が開催されました。

今回講師にお迎えしたのは、京都市左京区にあるいわくら病院のアルコール治療病棟担当医師の佐藤晋一さんと、同じく、いわくら病院アルコール治

療病棟担当看護師の杉山昌儀さんです。当日は高齢者福祉に関わる方をはじめ、障害者やフィリピン人の支援者など、約20名の方々が参加されました。

アルコール依存症治療に長年関わっておられる佐藤さんからは、アルコール依存症の基本的な理解についてお話しいただきました。「根性がない、意志が弱いからなるものではない」、「依存症を否認してしまう背景として、酒に寛容な社会、アルコール依存症のイメージの悪さなどがある」、「治る病気である」など、とてもわかりやすい内容でした。

また、アルコール治療病棟で看護主任を務めておられる杉山さんからは、家族の支え方についてお話しいただきました。アルコール依存症は家族を巻き込みやすい病気だからこそ、病気の正しい理解はもちろん、自分の時間や理解者、同じ悩みをもつ仲間が必要になるとのことでした。

参加者からは、職場で関わっておられる方々についての具体的な質問のほか、家族としての実体験のお話もあり、アルコール依存症についてより理解を深める時間となりました。



〈シリーズ〉登録団体との連携・紹介 (16)

NA 響グループ



Narcotics Anonymous®



NA とは、Narcotics Anonymous (ナルコティクス・アノニマス) の略です。日本語では、「匿名の薬物依存症者達」と訳します。NA は、1953 年 7 月、アメリカのサンバレーの AA (Alcoholics Anonymous = 「匿名のアルコール依存症者達」) ミーティングで回復していた数人の薬物依存症者と、AA メンバーではない何

人かの薬物依存症者とが作りました。日本では、1980 年に東京で、1986 年 7 月に大阪で始まりました。現在、12 エリアに分かれミーティングが開かれています。関西エリアは「大阪府・兵庫県・京都府・滋賀県・奈良県・和歌山県」の 2 府 4 県が含まれ、15 グループ、週 40 カ所でミーティングが行われています。

ミーティングの形式には一般の方も参加できる「オープンミーティング」(発言はアディクト [薬物依存症者] 本人のみ) と、アディクト本人のみが参加できる「クローズドミーティング」があります。本人同士の分かち合いを通して、薬物依存からの回復を目指しています。NA の回復への取り組みの基本には、一人のアディクトが他のアディクトを助けようとする事で、治療的な価値があるという考え方があります。メンバーは、経験や薬物依存からの回復について分かち合うために、NA ミーティングに参加しています。参加の予約や手続きもなく、入会金や会費もありません。

現在、響グループでは、関係者の方のご理解と仲間の協力により、ここ「京都市地域・多文化交流ネットワークサロン」さんをお借りして、ミーティングを開くことができます。ナルコティクス・アノニマスに関心を持って頂いたことに感謝しております。その他に、京都市伏見区でも会場をお借りしてミーティングを行っています。伏見区の会場では女性の方のみが参加できる女性クローズドミーティングも行っています。

NA は、未だ苦しんでいる依存症者にメッセージを伝えることを第一の目的と考えています。薬物使用を止めたいと望む方なら、どなたでもミーティングに参加できます。合法・非合法のものに関わらず、アルコールも含めて、薬物に問題があると感じている人ならどなたでも、NA は歓迎します。



〈サロンへのメッセージ〉

一人一人の人生から見えてくる歴史を大切にしたい

アンニョンハセヨ。みなさん、こんにちは。

東九条在住の梁説（やんそる）です。

みなさんはもう、2013 年の夏に京都市地域・多文化交流ネットワークサロンから発行された『東九条の語り部たち —14 人の聞き取り報告—』という冊子をご覧になられたでしょうか。長い間、東九条（やその周辺地域）で生活してきた 14 人の方たちへのインタビューが掲載されています。私はその聞き取り・編集作業に参加



『東九条の語り部たち —14 人の聞き取り報告—』より

しました。そして現在、第二弾の発行に向けて準備をしています。前回発行したものは、主に日本の植民地期に朝鮮半島から日本にわたってこられた在日一世の方々を中心に聞き取りを行いました。東九条に落ち着くまで、実に、日本のあちこちを移動し、生活の糧を求められる様子をつぶさに聞くことができました。炭坑や鉱山での仕事、そこからの逃亡劇といった戦中の話や、戦後の東九条で闇米やボロ屋をしながら家族を養った話、出会いや別れ、故郷のことなど、心の奥にしまってあったことがらを一つ一つ紡ぐように話してくださいました。

二回目の聞き取りは、東九条の生活史により重点を置くことを心がけました。日本で生まれ、東九条で子ども時代を送った在日二世の方や、結婚を機に東九条に越してこられ、苦勞しながら子どもを育て上げた方々の話を聞きながら、貧乏と希望（野望）、密集して暮らす人々の人いきれがごちゃ混ぜになりながら、一人一人がたくましく生きる東九条の様子を感じることができました。かつて国家間の争いや侵略が、多くの、とてつもなく多くの命を奪い、人々の人生を翻弄してきたことは間違いないでしょう。今も、歴史のとらえ方に個人差があることも確かです。その中で、二回の聞き取りを通じて感じられたことは、そのような時代にあっても、しっかりと生きてきた人々がいるということ、それはすなわち、人が生きる上で、稼ぐということ、食べるということの尊さでした。そしてそこには、必ず支えあいがあったということも、2つの冊子から知ることができると思います。

食べるために必死で働いてきた一人一人の語りは、そのすべてが私たちの近代史といえるでしょう。第二弾をご期待ください！（梁 説 ハンマダン）

□ 所在地：〒601-8006 京都市南区東九条東岩本町 31（京都市地域・多文化交流ネットワークセンター内）

□ TEL：075-671-0108 □ FAX：075-691-7471 □ E-Mail：salon_kyoto@ck9.so-net.ne.jp

□ 開館時間：9時～17時 □ WEB サイト：http://k-tabunka.com

□ JR 京都駅・京阪東福寺駅・市営地下鉄九条駅 徒歩 15 分

京都市バス 42・202・207・208 系統 九条河原町下車 徒歩 10 分